

特集 〈支える〉

江戸庶民の生活を支えた近郊農村

波多野 純

熊さんの朝

熊さん、八さん。落語に登場する江戸庶民の暮らしは、多くの人、なかでも近郊農村に支えられて成り立っていた。大工熊五郎、日本橋に近い裏長屋に住む彼は、最近嫁さんをもらった。

九尺二間に過ぎたるものは

紅のつきたる 火吹き竹

(江戸川柳)

四畳半一間に流しと竈が付いた裏長屋の狭小な生活空間、その日暮らし、仲間の大工には田舎から親を呼び寄せたヤツも多い。そんな中で自分には嫁さ



んがきた。竈の火をおこす火吹き竹に口紅がついて  
いるのを見て、思わずニヤツとしてしまう。

ニワトリの鳴き声にせかされるように、早々と目  
を覚ます。手拭いを肩に井戸端まで出掛け、顔を洗  
う。ひんやりとした水が心地よい。この井戸、地下  
水を汲み上げているのではない。神田上水・玉川上  
水つまり、都市施設としての上水道の水である。

猫の額ほどの裏長屋の井戸端には、このほか惣雪  
隠あるいは惣後架と呼ばれる共同便所や、ゴミ溜、  
お稲荷さんなどが設けられている。

いつもの習慣で、ついでに雪隠にしゃがむ。裏長  
屋の大便所には扉が下半分しかない。しゃがんでも  
顔が出てしまう。少し寝坊し遅くゆくと、お上さん  
たちの井戸端会議とぶつかってしまう。新妻も仲間  
だ。それでは出るものも出なくなってしまう。ここ  
で出した排泄物は、近郊の村人が汲み取り、肥料と  
なった。

部屋へ戻ると、ガチャンという音と嫁さんの叫び

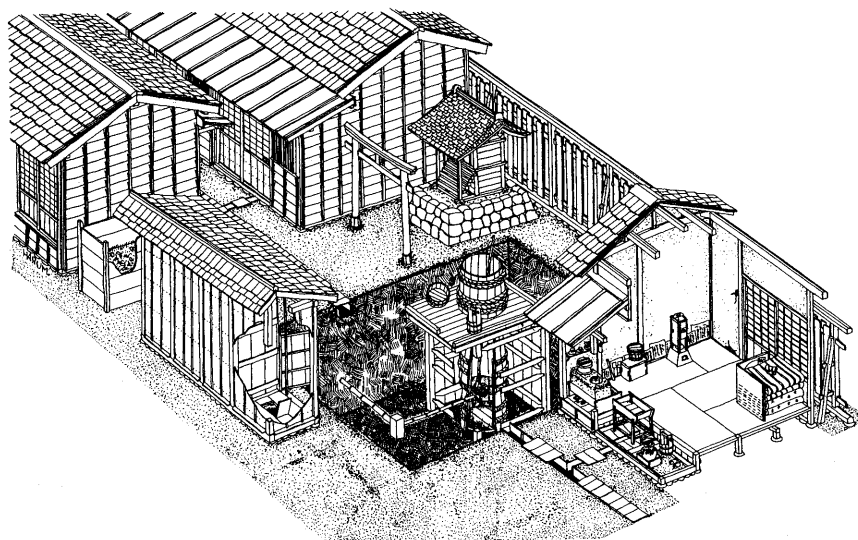
声。茶碗を落として割ったらしい。少しの割れな  
ら、貼り付けて使うが、粉々になったものではどうし  
ようもない。ゴミ溜に捨てる。ここに溜まったゴミ  
は、まとめて舟に積まれ、深川の埋め立てに利用さ  
れた。

お稲荷さん、小さな祠だが、毎日交代で油揚げを  
供え、水を替える。江戸には、「伊勢屋稲荷に犬の  
糞」と言われるほどに、お稲荷さんが多かった。

### 江戸の暮らしを支えた神田上水・玉川上水

裏長屋の各戸には、流しはあるが、上水は導かれ  
ていない。飲み水や調理の水は、井戸から汲んでき  
て、瓶に貯めて使う。したがって、野菜を洗うなど  
調理の下ごしらえや、食器洗い、衣類の洗濯など  
は、すべて井戸端で行う。お上さんたちは、一日の  
うちのかなりの時間を、井戸端で過ごした。

この井戸には、神田上水・玉川上水の水が導かれ  
ている。神田上水は井の頭池（東京都武蔵野市）を



▲江戸の裏長屋の一角…上水井・雪隠・ゴミ箱・稲荷が並ぶ

波多野純建築設計室

水源とした。玉川上水は多摩川の水を羽村（東京都羽村市）で取り入れ、延々四〇数キロメートル、素堀りの水路で導かれ四谷大木戸に達した。そこから地中に埋設した水道管となり、石垣樋・石樋・木樋・竹樋などを使った網の目のような水路を通って、裏長屋の一角にまで達した。

時には、多摩川の魚が紛れ込むこともあるなど、必ずしも清潔な水ではなく、江戸時代中期以降には深井戸を掘るものも出たが、玉川上水が江戸庶民の生命線であることに変わりはなかった。玉川上水を開削した玉川庄右衛門・清右衛門に繋がる玉川家が、羽村の取水口や水路の沿線を管理した。近郊農村である小金井あたりには、護岸保護のために桜が植えられ、今も花見の名所となっている。玉川上水はまた、野火止水水など近郊農村の農業用水としても利用された。

この水が、裏長屋の井戸まで導かれる。井戸には底板があり、ゴミが沈殿する仕組みとなっている。したがって、井戸の水を干し、底を掃除する、井戸浚いは、長屋の住人が総出で行った。そこには、同じ釜の飯を食ったと同質の、同じ上水の水を飲んだ仲間意識が存在した。

### 村に支えられた糞尿の処理

長屋の住人の共同便所、惣後架で熊さんが出したウンコ。彼の尻を離れた瞬間から、彼のものではなく、大家の持ち物になった。屎尿は、肥料としての商品価値があった。大家さんは、長屋の住人たちの排泄物を、近郊の農家に汲み取りに来させ、その謝礼として、最初は野菜を、そのうちに金銭を受け取るようになった。

大家 店子の尻で 餅をつき (江戸川柳)

大家さんも店子の排泄物で儲けるのは少し気が引

けたのか、その収益を貯めておいて、年末に店子に餅を配った。年末には、大家さんと近郊農村のお百姓さんの間で、おかしなせめぎ合いが繰り返された。早く汲み取ってもらって、清潔にしたい大家さんと、なかなか汲み取りにゆかず、大家さんが値を下げてくるのを待つお百姓さん。と言って、大家さんが粘り過ぎれば、汚いままに年が明けてしまう、お百姓さんが粘り過ぎれば、他に売られてしまう。なんとも滑稽な駆け引きである。

江戸っ子の排泄物は、近郊農村で肥料となり、やがて野菜となって江戸へ戻ってくる。そこには、比較的分かりやすい、目に見えるリサイクルシステムが、成立していた。

### 紙は漉き返し、ゴミも埋め立てに

ゴミはどうだろうか。江戸のゴミは、現代と較べれば、かなり少なかったと思う。大福帳などの帳簿は、使い終わると裏返して、もう一度帳簿として使

われる。その後、故紙屋に買い取られ、多様に処分される。内容がおもしろそうなものは、古本屋に売られる。丈夫そうな紙は、接骨医名倉の膏薬張りに利用された。残りは、近郊農村に届けられ、一度溶かして漉き返し、落とし紙として、江戸へ戻ってきた。

食べ物のゴミも、魚の骨や貝殻など、ごくわずかであった。江戸のゴミの大半が、深川の埋め立てに利用されたことからすると、割れた陶磁器や瓦、崩れた壁土など、土系のゴミが多かったように思う。

江戸では、ゴミ処理も、近郊農村の世話になっていた。

### 支えあう都市と村

江戸の飲み水は、近郊農村を延々と流れて来た水であった。排泄物やゴミも一度近郊農村で処理され、やがて野菜や落とし紙など暮らしたに役立つものに姿を変えて、江戸へ戻ってきた。

では、江戸は近郊農村に世話になりつ放しなのだろうか。そんなことはない。江戸には、都市にしかない多様な技術や芸をもった職人や役者がいた。その人たち、自分では米や野菜も作れなければ、ゴミの処理もできない。そんな、村なら穀潰しに過ぎない人々が生きられる場所が都市であり、それらの人々もつ優れた技術や芸が都市の魅力であった。都市と村は、たがいに役割を分担することで、支え合ってきた。

(日本工業大学／建築史・都市史)

